

『物理基礎/化学基礎/生物基礎/地学基礎』の「地学基礎」，『地学』

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

「地学基礎」

1 前 文

「地学基礎」は、地球環境の変化、日本の自然環境とその恩恵や災害など、日常生活や社会との関連を図りながら、地球や地球を取り巻く環境に関心をもたせ、科学的に探究するために必要な資質・能力を育成する科目である。共通テストとしては今回が5度目の実施、新たな学習指導要領のもとで実施された共通テストとしては初年度の実施となる。

令和7年度共通テスト本試験の「地学基礎」受験者数は46,285人で、昨年度に比べ2,912人と大きく増加した（一昨年度→昨年度は303人の増加）。また、平均点は34.49点（50点満点）で、昨年度より1.07点下降した。

評価に当たっては、「大学への入学志願者を対象に、高等学校の段階における基礎的な学習の達成の程度を判定し、大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的として、各教科・科目の特質に応じ、知識・技能のみならず、思考力・判断力・表現力等も重視して評価を行うものとする。」という共通テストの趣旨に基づき、本年度の「地学基礎」本試験の試験問題について、21ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内 容・範 囲

出題内容や出題範囲については、おおむね教科書に準じた内容から構成されていた。学習指導要領に示された範囲から出題されている問題がほとんどであったが、一部に「地学基礎」の範囲外の問題も見られた。

出題範囲を詳細に見ると「固体地球分野」が2問（うち1問が「大気・海洋分野」及び「環境・災害分野」にも分類できる）、「岩石・鉱物分野」が2問（うち1問が「環境・災害分野」にも分類できる）、「地史・地質分野」が3問（うち1問は「環境・災害分野」にも分類できる）、「大気・海洋分野」が4問（うち1問は前述の「岩石・鉱物分野」「環境・災害分野」との融合問題）、「天文分野」が4問であった。この他に、様々な地学的現象のスケールを問う総合問題が1問あった。

旧課程での学習指導要領においては、「宇宙の中の地球」「変動する地球」という2項目からなっていたが、新課程となり「地球のすがた」「変動する地球」の2項目となった。旧課程における「宇宙の中の地球」にあった「宇宙の構成」については、大幅に削減され、「変動する地球」の中で、「地球の変遷」という項目に位置付けられることとなった。

このことを踏まえると、新課程のもとで実施された試験としては、「天文分野」が独立した大問となっており、やや出題数も多い印象をもつ。全15問中4問が「天文分野」で、配点としては50点中の14点分である。旧課程のもとで実施された昨年度の出題数は全15問中3問で、配点としては10点分であった。新課程となり、「天文分野」の内容が削減されたにもかかわらず、問題数、配点とも旧課程のもとで実施された昨年度のテストよりも増加している。更に「天文分野」からの1問は、「地学基礎」の範囲外と言える内容であり、教科書によっては全く記述のない内容であった。

また、「天文分野」，「地史・地質分野」では同じ事項を扱う問題が連続したことも気になった。理科基礎科目は問題数が少ないため，1問の扱いが全体のバランスに大きく影響する。大問構成も含めて全体のバランスにはより慎重な姿勢が望まれる。

その他については，災害や環境に絡めた出題が4問，配点では14点分と，地学分野からのメッセージ性のある問題が適切な配分で出題されていた。

内容については，思考力・判断力・表現力等を要する問題が多く見られ，共通テストの問題作成方針にのっとったものであった。また，基礎的な知識を問う問題，図やグラフを読み取る問題など様々な問題が見られ，工夫された良問が多くあった。

以下，幾つか個別の問題について述べる。

第1問Bの問4については，空欄「ウ」が気象に関する設問，空欄「エ」が火山災害に関する設問である。内容的には平易であるが，自然現象は領域の異なる様々な要素から成り立っているというメッセージ性のある良問であった。

第2問の問3は，海水中の塩分と海水の凍結・融解に関する問題である。単純な知識を問う問題にならないよう工夫されていたが，‰（パーミル）については，幾つかの教科書に記載がない。また，塩分の分布については発展扱いとなっているが，海水の凍結・融解との関係については多くの教科書で深層循環の項に記述がある。しかし，正答率は52.60%とやや低かった。

第3問Aの問1・問2は宇宙のはじまりに関する問題で，やや細かい知識を要する。また，同じ事項に関連した出題が2問続いていることは再考の余地がある。

第3問Bの問3は銀河系の構造に関する問題で，旧課程では全ての教科書に記述があったが，新課程となり一部の教科書では扱われなくなった。新課程履修者の一部と旧課程履修者で学習に差がつく設問であった。移行措置期間であることを考慮すると，新課程履修者用と旧課程履修者用とで選択問題にすることも考えられた。ただし，問題の難易度としては平易で，中学校理科で扱われている内容でもあり，正答率は70.69%と低くはなかった。

第4問の問1は地学的現象の時間・空間スケールを問う問題で，津波や台風，エルニーニョ現象や地球温暖化という自然災害，地球環境問題を扱う総合問題となっている。地学という教科の特性を生かした工夫された良問である。

3 分量・程度

大問4問構成で，小問数は15で構成されており，大問数，小問数とも昨年度と変更はなかった。ただし，新課程となり「天文分野」が「地球の変遷」の一部という扱いになったことを踏まえると，「天文分野」と「地史・地質分野」を融合させた大問構成とすることも考えられる。

全体としての分量は，妥当な量であり，多くの受験者は時間内に解答することが可能であったと考えられる。

各問題の配点は3点又は4点となっており，適切であった。選択肢数は4択が11問，6択が3問，8択が1問と，昨年度よりも選択肢の多い問題が増加した（昨年度は6択が1問で，7択以上の問題はなかった）。全体の難易度を，A（平易），B（標準），C（やや難），D（難）と区分し，Aを7問，Bを7問，Cを1問，Dを0問と分析した。昨年度より，ややAが減り（昨年度は9問），Bが増えた（昨年度は4問）。また，Cと分析した問題は，かなりDに近い難易度の問題であった。それらのことが，僅かな平均点の低下につながっていると考えられる。しかしながら，全体としてのバランスは非常に良い。

以下，幾つか気になった問題について述べる。

第2問の問2は南北の水蒸気輸送に関する問題である。水蒸気という気体の輸送に関連する問題

なので、大気の流れを考えれば難しい内容ではない。しかし、正答率は 34.28%と、他の問題に比して極端に低かった。図中に蒸発量だけでなく降水量も示されていたために、過剰な水分が不足する地域に輸送されると勘違いした受験者が多くいた可能性がある。

第4問の問1は、地学的現象の時間・空間スケールを問う問題である。多くの教科書で扱われている図ではあるが、第4問の冒頭に「自然災害」という語が出てくるので、現象としてのスケールを聞いているのか、災害としてのスケールを聞いているのか紛らわしい。しかしながらグラフは対数目盛となっており、かなりの幅をもって示されているため、解答に困ることはない。

4 表 現・形 式

全体として、受験者に分かりやすい表現が用いられており、理解しやすいものであった。形式については、「項目判断」（該当する項目を選択する問題）、「文章判断」（該当する文章を選択する問題）、「計算」（計算が主体となる問題）の3項目に分類した。「項目判断」は11問であり、昨年度より1問増加した。「文章判断」は4問であり、昨年度より1問増加した。昨年度2問出題されていた「計算」を要する問題は、今年度はなかった。また、「実験」に関する問題は、昨年度に引き続き出題されなかった。科学的な思考力・判断力・表現力等を育成することは地学教育においても不可欠である。観察、実験的な要素を含む問題については、是非出題していただきたい。

以下、幾つか個別の問題について述べる。

第1問Aの問1は太陽系の天体の性質に関する問題で、問題文中に示されたグラフは対数グラフとなっている。天王星・海王星が示されておらず、月が示されている点が目新しい。しかしながら設問は平易で、グラフが生かし切れていない点が残念である。

第1問Aの問2は、プレートテクトニクスに関する基本的な問題である。イの選択肢については「密度が小さい」、「密度が大きい」という単純な二択ではなく、「温度が低い」という選択肢とすることによって、プレートの沈み込みという場面における本質を問う良問となっている。

第1問Cの問5は問題文中に「観察」の語が出てくるものの、堆積構造を写真から判断するだけの問題にとどまっている。「観察、実験」的要素のある問題というほどではない。また、図の説明にある、「地層の層理面（A）」という文言を見逃すと混乱する可能性がある。

第4問の問2は地質柱状図に関する問題である。図から読み取ることのできる事柄について述べた文章の正誤を問うている。正答である②をいきなり答えることはやや難しいが、消去法で考えれば易しい。本試験の問題で唯一、量的な扱いがあるが、「計算」の要素のある問題というほどではない。

第4問の問3は地震、活断層など、多岐にわたる内容を盛り込んだ問題である。設定がやや複雑ではあるが、工夫された良問である。

5 ま と め（総括的な評価）

○高等学校の授業改善への影響

今回の共通テストでは、おおむね「地学基礎」の教科書に準じた内容から出題されていた。基本事項の理解をはじめ、文章や図、グラフから必要な情報を読み取ること、自然現象を地学的な視点から考察すること、自然災害や防災、地球環境の変化について考えることなどが求められた。高等学校では、知識・技能の習得とともに、日常生活や社会との連携を意識させながら、科学的

に探究するために必要な資質・能力を丁寧に育成する必要がある。

○意見・要望・提案等

上記のように検討した結果を、前述の8項目の観点から次のように要約し、今後の試験問題の作成に対し、要望・提案を行う。

- (1) 共通テスト問題作成方針を踏まえ、知識の理解を問う問題だけでなく、思考力・判断力・表現力等が求められる問題が見られ、バランスの取れた出題となっていた。
- (2) 出題内容や出題範囲については、おおむね学習指導要領の定める範囲内であったが、一部に範囲外といえる問題があった。しかし、内容的には中学校での既習事項であった。
- (3) 問題で使用された題材については、おおむね適正であったが、幾つかの教科書に記述のない事項が扱われていた。
- (4) 図やグラフを用いた問題は、普段の学習で経験してきたことを生かして考察する内容であった。また、地球環境や自然災害に目を向けるなど、共通テストの問題作成方針を踏まえた設問が複数あり、適切であった。
- (5) 大問は4問構成で、小問数は15問で構成されており、各設問の配点については3点又は4点で、おおむね適切であった。選択肢数は4択が11問、6択が3問、8択が1問と、昨年度よりも選択肢の数が増加した。
- (6) 全体として、受験者にも分かりやすい表現が用いられており、理解しやすいもので、おおむね適切であった。
- (7) 問題の難易度は昨年度と同様で、一部にやや難解な問題も含まれていたが、全体としてはおおむね適切であった。
- (8) 得点のちらばりはおおむね適正であった。

「地学基礎」の全ての領域について、真摯に学んで試験に臨んだ受験者が正答を選ぶことができるような配慮が認められた。選択肢数は昨年度より増加したが、いずれも妥当な範囲内であり、解答に過大な時間がかからないよう工夫されていた。さらに、地球環境や自然災害を扱った多くの小問が大問のなかに適切に散りばめられており、現代社会を生きていく上でのメッセージ性を強く感じた。

今年度は異なる領域からの融合問題も出題された。一つの題材の中で様々な分野、領域を横断的に扱うという姿勢は、受験者の学習意欲の向上や目的意識の確立に大いに寄与するものと考えられる。与えられた情報を把握、整理し、更にそれらを再構築して新たな結論を導き出す力が求められるような出題もあった。

一方、高等学校の授業で想定される観察、実験等の活動については直接的に問われることがなかった。共通テストの趣旨が、「(前半省略)…各教科・科目の特質に応じ、知識・技能のみならず、思考力・判断力・表現力等も重視して評価を行うものとする。」となっていることを鑑みると、今後は、観察、実験等の活動について扱う問題が出題されることを期待する。

共通テストの問題には、地学教育という立場からの、高校生や社会全体に対するメッセージ性があると考えられる。地学では、地球環境や自然災害も含め、身の回りの様々な現象を扱っている。そのような身の回りの学問を意識させるような作問をお願いしたい。

最後に、各方面から寄せられた意見や要望を真摯に受け入れ、内容を詳細に吟味され、熱意を持って作問された問題作成委員の諸先生方のこれまでの御努力に対して、深く敬意を表したい。次年度以降も引き続き意見や要望を積極的に作問に反映していただき、良質な問題を期待する。

『地学』

1 前 文

「地学」は、「地学基礎」との関連を図りながら、更に進んだ地学的な方法で自然の事物・現象を取り扱い、観察、実験などを通して地学的に探究する能力と態度を身に付けさせるとともに、地学の基本的な概念や原理・法則の理解を深めさせ、科学的な自然観を育てる科目である。

令和7年度共通テストの本試験の受験者数は461,505人（昨年度より4,978人増）であった。理科の延べ受験者数についても、「物理」「化学」「生物」の受験者が6,000人増加した。「地学」受験者数も2,365人で、昨年度より573人増加し、「物理」「化学」「生物」「地学」全受験者数の0.6%（昨年度は0.5%）であり、年度を追って少しずつ増加傾向にある。また、平均点は41.64点であり、共通テスト開始以来最高点であった昨年度の56.62点より14.98点下降した。

評価に当たっては、共通テストの趣旨である「大学への入学志願者を対象に、高等学校の段階における基礎的な学習の達成の程度を判定し、大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的とし、各教科・科目の特質に応じ、知識・技能のみならず、思考力、判断力、表現力等も重視して評価を行うものとする」に基づき、本年度の「地学」本試験の問題について、21ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内 容・範 囲

出題内容や範囲については、学習指導要領の定める範囲内であり、おおむね教科書に準じた内容で構成されていた。小問別に見ると「地球の概観」に関する設問が3問、「地球の活動と歴史」に関する設問が10問、「地球の大気と海洋」に関する設問が7問、「宇宙の構造」に関する設問が7問であった。昨年度より「地球の概観」と「宇宙の構造」に関する設問がそれぞれ1問増加し、「地球の活動と歴史」に関する設問が1問減少した。これだけ見ると偏りがあるように見られるが、「固体地球」「岩石・鉱物」「地史・地質」「大気・海洋」「天文」の5分野で分類すると、それぞれ5問、6問、3問、7問、6問となり、大気・海洋がやや多い傾向はあるが、全体的にはバランス良く出題されている。新課程より「地学」の教科書が1社になったため、出題範囲の偏りはない。

内容については、基本的な知識の組合せやその正誤判断、探究活動や観察・実験、野外実習や天体観測などを題材として、観察、実験や探究活動についての理解力や思考力・判断力・表現力等を問う問題、図表やグラフを読み取り、数学的处理能力や思考力・判断力・表現力等を問う問題など、共通テストの問題作成方針を踏まえた設問が多くあり、適切であった。

以下、個々の設問について意見を述べる。

第1問は地学現象の測定・観測に用いられる機器の使用や関連する知識に関する小問である。地学的な知識だけではなく観察や実験の結果求められる事実や知識、観察・実験の方法、観察結果から考察できること等を題材に、多領域にわたる地学現象について小問で構成された分野横断型の総合問題である。「知識は観察、実験の結果求められる」というのは、地球科学の理解の根幹であり、出題者の意図が明確に伝わる。問1はプリズムを用い分光器とスペクトルの投影順序の、問2は地磁気の伏角の測定の問題である。特に問3のクリノメーターの使用法と問4の鉱物の晶出順序の問題は実際に観察や実験をしていれば容易に正解できる問題であり、出題者の強い意図を感じる。問5は高層天気図の問題である。

第2問は固体地球に関する問題である。問1は地磁気についての様々な知識が問われる問題である。地磁気静穏期の日変化の原因を知っていれば答えやすい。知っていなくても、他の三つの

選択肢は全て正しいことが容易に理解できる。問2は平均太陽とうるう秒に関する問題である。限りある少ない時間の中でここまできちんと学習しているかどうか問われる。問3はP波の伝わり方と走時曲線からP波の速度と震源の深さを考察する問題である。よく考えないとできない問題であるが、左の断面図がヒントになっている。分かったと感覚的に解答できる。きちんと課題を解決できる良い問題である。また、一方で、地道に選択肢を一つ一つ試してつぶして検算しても正答にたどり着ける。問4はコールドプルームの密度が大きく、密度が大きければ波の伝わる速さが速いことを知っていれば正答できる。

第3問、問1は変成作用とマグマに関する問題である。図が示されるのが理想だが、表中のウがホルンフェルスであることが分かれば正答にたどり着く。図は昨年度出題された。問2はマグマの「同化作用」という用語を知っていれば容易である。問3と問4は地質図の問題である。問3の地層の走向と断層の傾斜・活動時期は容易に正答できる。問4の地質現象の順序を読み取るためには地質断面図を書く必要があるが、不整合のE層があるので書きにくい。悪い問題ではない。正答率は50%を超えている。問5は年代測定法の問題である。「測定法と測定される年代」の図を把握している必要があるが、そこまで深く学習したかどうか。図を出して考察させるのも一つの案である。半減期を大きく過ぎた同位体は年代測定には使用できないことを知っていて欲しい。問6は生命や地球環境についての問いである。生命と環境変化についてきちんと学んでいれば容易に正答にたどり着く。または、正しい選択肢を一つ一つ吟味し除外していけば、一つしか残らない。問7は第四紀の気候変動についての文章の正誤問題である。bまできちんと勉強しているかが問われる。現在の気候変動の研究がどのように行われているかを示しており良い問題である。

第4問Aは気象の問題である。問1は温帯低気圧での各地の風向きについての問いである。考察すれば容易に正答にたどり着ける。問2は基本的な問題である。教科書の図のとおりである。問3は飽和水蒸気量と相対湿度の問題である。きちんと考えれば容易に正答できる。解答に時間のかかる問題ではあるが、受験者には是非取り組んで欲しい問題である。問Bは海洋の問題である。問4は海流の基礎的な問題。平易である。問5は地形と潮流の関係、気圧と海面の関係の問題であり容易である。寄せ集め的な問題である。問6は潮流（地衡流）の問題である。海流のことを知らなくても、大気現象でコリオリの力と地衡風を知っていても正答できる。平易な問題であり、図を描いて考える思考を問う問題である。ただし、実際の正答率は30%台後半で高くはない。

第5問は宇宙に関する問題である。問Aは原始星の問題である。問1は知識があれば正答できる。問2は暗黒星雲の基礎的な問題である。問3はウィーンの変位則の式を知らないとは解答できない。計算が必要である。良い問題である。残り3問（27問中の25問目）の時点で粘り強く落ち着いて計算できるかどうか、桁違いをしないかが問われていると思う。このような力も必要である。問Bは連星と系外惑星の問題である。問4はドップラー効果の問題である。基礎的な問題である。問5は系外惑星の問題である。時期Pにおける暗線の波長の変化量は多少難しいかも知れない。難易度は高い。連星と同じことが系外惑星で言えるということが分かれば良い。

3 分 量・程 度

大問は5問構成で、小問数は27で構成されていた。解答番号数は昨年度と同じであった。ページ数は昨年度より3ページ増え33ページであった。図表やグラフを活用する設問は15問で、昨年度の16問、一昨年度の19問から減少した。観察、実験や観測に関する設問は昨年度の3問から一昨年度

と同様の4問に戻り，計算問題は1問増え3問となった。昨年度と同様にて，思考力・判断力・表現力等を必要とする設問や計算問題の割合が減り，基本的な知識を基に思考・考察する設問の割合が増加したことや，問題文の長さや量も適切であったため，全体としての分量は妥当であり，受験者は時間内に解答することが可能であったと思われる。

選択肢数は4択が21問，6択が5問，8択が1問であった。昨年度は4択が19問，5択が1問，6択が6問であった。一昨年度は4択が26問，6択が1問であったことから，今年度は昨年度と同様の傾向であると考えられる。8択問題が復活した。4択問題の平均正答率46％に対し6択問題は31％，8択問題は15％であった。選択肢の数については工夫が必要かも知れない。

難易度についてはA（平易）が4問，B（標準）が18問，C（やや難）が4問，D（難問）が1問と分析した。平均点は41.64点と，昨年度の56.62点より14.98点低く，難化したと言える。昨年度の本試験はA（平易）が7問，B（標準）が17問，C（やや難）が2問，D（難問）が0問と分析されているため，今年度はやや難の設問が増加し，平易の設問が減少した分，平均点が下降したと分析する。今回，平均点が下降したのは，地磁気・うろう秒・変成作用・地質断面図・年代測定法・天気図・断熱減率・系外惑星などの知識が不十分な受験者が多くあったことと，晶出順序・P波の速度と震源の深さ・地衡流などの地道で十分な思考が必要な問題が避けられたことが原因であると推察される。問題全体に占めるAとBの割合は8割程度であり，昨年度と大差は見られない。出題の狙いとされる思考力・判断力・表現力等を必要とする設問に受験者が対応できていないことが一因として考えられる。クリノメーターの使い方・鉱物の晶出順序・震源の深さの求め方・地質断面図の書き方・飽和水蒸気量と相対湿度・ウィーンの変位則の計算等は高等学校では是非ともやってきて欲しい内容だという出題者からのメッセージ性のある良問である。

4 表 現・形 式

全体として，受験者に分かりやすい表現が用いられており，理解しやすい内容であった。多くの設問に図表やグラフが用いられるなど，全体的に工夫が感じられた。

形式については，項目判断：該当する項目を選択する設問，文章判断：文章を選択する設問，計算：計算が主体となる設問の3項目に分類した。項目判断は19問あり昨年度より3問増加した。文章判断は5問あり昨年度より3問減少した。計算は3問であり昨年度より1問増加した。また，正誤の組合せ問題は3問あり昨年度と同数である。出題形式のバランスは適切である。

以下，幾つか個別の設問について述べる。

第2問，問3は，P波の伝わり方の図とその走時曲線のグラフからP波の速度と震源の深さを求める計算問題である。走時曲線のグラフから震央距離（km）と走時（秒）を読み取り左の断面図に書き込んでいくことで，直角三角形の辺の長さが3：4：5であることが分かれば，あとは感覚的に解答できる。作問に工夫が感じられた良問である。

第3問B問3と問4は，地質図から走向を読み取り断面図を書いて考察する問題である。不整合の上に乗っている礫岩層Eがあることでやや難易度が上がった。

5 ま と め（総括的な評価）

○高等学校の授業改善への影響

今回の共通テストでは，「地学」の教科書に準じた内容から，基本事項の理解を見る問題だけでなく，観察や実験の結果について，グラフや図から読み取り考察する問題や，グラフや表に受験者自らが表現し可視化した上で考察する問題も出題された。地学的な思考力・判断力・表現力等を見る問題が，様々な形式で出題されていた。高等学校では，基本事項の理解だけにとどまらず，

観察や実験を実際に行い、観察や実験の結果をグラフや図から読み取り考察する力や、グラフや図に表現する力をしっかりと身に付けさせることが必要である。

○意見・要望・提案等

上記のように検討した結果を、前述の8項目の観点から次のように要約し、今後の試験問題の作成に対し、提案・要望を行う。

- (1) 共通テスト問題作成方針を踏まえ、基本事項の理解を問う問題や思考力・判断力・表現力等が求められる問題が、バランス良く出題されていた。
- (2) 出題内容や範囲については、学習指導要領の定める範囲内であり、おおむね教科書に準じた内容で構成されていた。大気・海洋分野がやや多い傾向はあるが、全体的にはバランス良く出題されていた。
- (3) 問題で使用された題材は、新課程の教科書が1冊しかないことにより、特定の教科書への偏りは考える必要はなかった。
- (4) 探究活動や観察、実験、野外実習など、共通テストの問題作成方針を踏まえた設問が複数あり、適切であった。
- (5) 選択肢数が6択の問題が5問、8択の問題が1問あり、例年に比べ多かったが、設問数、配点、設問形式はおおむね適切であった。
- (6) 全体として、受験者にも分かりやすい表現が用いられており、理解しやすいもので、おおむね適切であった。
- (7) 設問によってはやや難易度が高いものも見られたが、全体の難易度は適切であった。
- (8) 得点のちらばりはおおむね適正であった。

今回は、「地学」の内容を確実に学習した受験者が、時間内に解答できる分量と内容になっていた。また、観察、実験、野外実習を扱った問題は、共通テストの問題作成方針にのっとり、探究的な学びを促す役割を果たすと同時に、学習者の興味を喚起する工夫がなされていた。

地学は総合科学であり、それぞれの分野の知識が様々なところでつながっている。第1問は地学現象の測定・観測に用いられる機器の使用や関連する知識に関する小問で、このような問題が冒頭に出てくことは、「知識は観察・実験の結果求められる」という地球科学の根幹の問題であり、出題者の強いメッセージが明確に伝わることとなる。また第4問のように、あるテーマに沿った具体的な分野横断的な問題は、地学の特性を感じさせるものであり、どんなテーマで出題されるのかが毎年楽しみである。今後も無理のない範囲で出題を続けて欲しい。

共通テストがスタートして5回目の、また新課程最初の本試験であったが、前回初めての5割台後半の平均点が再び4割台に戻ってしまった。出題内容は多岐にわたり、選択肢数が6択の問題も多く出題された中、是非昨年同様の5割台後半の平均点となる作問がなされることを期待したい。

今後も受験者の側に立った難易度、分量、全体のバランスを考慮していただき、平均点を6割程度にするための問題作成の工夫をお願いしたい。正答率を上げていかないと共通テストの「地学」受験者も、ひいては「地学」履修者も増えてはいかないと思う。

最後に、各方面から寄せられた意見や要望を真摯に受け入れ、内容を詳細に吟味され、熱意を持って作問された問題作成委員の諸先生方のこれまでの御努力に対して、深く敬意を表したい。次年度以降も引き続き意見や要望を積極的に作問に反映していただき、適切な難易度かつ良質な問題を期待する。